

文化庁では、我が国の芸術文化の振興のため、芸術家等を海外に派遣し、その専門とする分野について実地に研修する機会を提供する芸術家在外研修制度を昭和四二年度から実施しています。

本制度は、これまで一六〇〇名を超える芸術家の方々を海外に送り出してきましたが、研修員ひとりひとりの研修の実体を伺い知ることは、なかなかできませんでした。

現在ニューヨークで研修中の俳優・森永明日夏さんと演出家・砂川幸子さんのお二人に連載をお願いして、研修中彼らが何に悩み、喜び、苦労しているかなど、生の声を聞くことができたいと思います。

ニューヨークにきた

森永明日夏



皆様、はじめまして。俳優座の森永明日夏です。私は、文化庁在外研修派遣制度で二〇〇一年九月から二〇〇三年八月までの約二年間、ここNYで演劇の勉強をする予定です。

私は、ウエストビレッジ（芸術家が多く住むお洒落な街）にある「HBS STUDIO」（ハーバード・バーコフスタジオ、トニー賞女優ウタ・ハーゲンも先生）で演劇学生として日々英語に苦労しながらも楽しんでます。今、とっているクラスは、ヨガ、ボイストレーニング、スピーチ（外国人である私には必須！）ジャズダンス、アクティング、シーンスタディなどなど。クラスメイトは地元ニューヨークのほか、ドイツや、イスラエル、ベネズエラからの留学生や、日本、韓国、中国のアジア系など。とにかくNYだけあって世界中から人が集まっています。

より

オン・ブロードウェイの研修

砂川幸子



私の研修先は、オン・ブロードウェイの劇場です。演劇に関わるようになってからずっと思い描いていた夢が叶い、シヨウビジネスのメッカで演出の勉強をしています。

研修先のランドアバウト劇場は、期間限定の公演を年間八本制作するので、ひとつひとつの作品の過程を丁寧に観察することができます。大きな団体で、研修生だけでも私の他に一〇人以上います。いずれもアメリカ人で、舞台裏に参加できるプロダクション部を希望しています。実際の部署は狭き門で二人しか配属されていません。私は、日本政府から来ているということ、優遇してもらっています。

一口に演出の勉強といっても、色々な方法がありますが、私は、演劇の稽

古場・舞台稽古・プレビュー・本公演すべてに立ち会って、見学者というよりは、まるでスタッフの一員のように公演に参加しています。演出家の話をいつも聞くことができ、それに対する俳優の返事も目の当たりにできるといって、最高の研修です。

見ているばかりでは悪いので、率先して掃除をしたり、コーヒーを入れたり、細々とした雑用もやっています。そんな日常の積み重ねから、俳優・スタッフとの強い信頼関係が生まれ、また、彼らと意見を交換することで、「一つの作品」という教材からたくさん応用問題に出会い、取り組んでいます。



The Woman

新進芸術家在外研修報告

文化庁芸術家在外研修員レポート

文化庁では、我が国の芸術文化の振興のため、芸術家等を海外に派遣し、その専門とする分野について実地に研修する機会を提供する芸術家在外研修制度を昭和四二年度から実施しています。

本制度は、これまで二六〇〇名を超える芸術家の方々を海外に送り出してきましたが、研修員ひとりひとりの研修の実態を伺い知ることが、なかなかできませんでした。

現在ニューヨークで研修中の俳優・森永明日夏さんと演出家・砂川幸子さんのお二人に連載をお願いして、研修中彼らが何に悩み、喜び、苦労しているかなど、生の声を聞くことができました。

オン・ブロードウェイの研修②

砂川幸子



私は、主にブロードウェイ公演の観察をさせてもらっています。半年間に、二つの公演の正式なオブザーバーとして、稽古場と本公演に、スタッフにびったり足並みを揃えていさせてもらっています。

公演は基本的に夜間が多いので、稽古のない平日の昼間には、過去の上演台本・資料を読んだり、小道具製作場を見学したり、最近ではミュージカルのオーディションに立ち会いました。

審査室には、キャストイングディレクターと、ピアニストと、私の三人だけ。オーディション予約者は、待合室で登録をした順に六人ずつ審査室に案

内されます。彼らの資料は、案内人が六人分ずつまとめて運んできて、資料の順に一人ずつ入室してきます。曲は各自が持参、基本的に一六小節聴かせるといふ規則があり、入室すると、ピアニストと譜面の打ち合わせをして、そして、いざ、本番。

それぞれが、作品・役に合った自分の魅せ方を計算して、衣裳もそれなりに凝ってきているのに驚きました。それぞれが個性的でパワフルで、(時には破天荒な人も現れ、冷や汗もかきました)俳優達の訓練の深さに改めて感動しました。

在 外 研 修 だ よ り

ニューヨークにきた②

森永明日夏



皆さまこんにちは。NYにもやっと、春が近づいてきましたよ。

さて、NYで演技の勉強って何してるの? って不思議に思っている方もいるでしょうね。前回も書いたとおり、NYの演劇学校に入り、ヨガ、ジャズダンス、ボイストレーニング、発音矯正など……がんばっているわけです。そして演技。英語で芝居しています! もうソーリャー、大変ですつ。でもね、すごく楽しい。

前回は三人一組になって先生がグループごとに単語を与える、そしてその単語を元に即興の芝居をつくるというのをやりました。チャッド、イボンヌ。私のパートナー達です。じつは、クラスでもあまり話したこともなく、最初の話し合いはぎこちなくスタートしたのでした。私たちがもらった単語はA D D I C T (中毒とかはまるとかいう意味)。テーマを決め、細かいタスクを決めて、私がアイデアを出すと、二人ともすごく乗り気になってくれて、だいたいの骨組みは完成。後は、何でこの学校にいるの? とか、なんだ芝居のクラスとつてるの? なんてこと

ばかり話してました。

それなのに、まさか、あんなに最高のインプロ(即興劇)ができるなんて!! 面白かったんです。先生も生徒もおおっけで、終わった後拍手がでたんだから! 今までニコリともしてくれなかったクラスメイトが肩をたたいて、アスカよかったよ! って言ってくれたときは、本当に嬉しかった。なんか、私って小さいアジアの女の子が何しにきたの? みたいに見られてるところがあったけど、なんかちよつと認められた気がした。

その次のクラスでは、ダイアローグ(シーンパートナーと組んで行う芝居)もしました! そのことは、また今度。



ハーバード・パークスタジオ

文化庁では、我が国の芸術文化の振興のため、芸術家等を海外に派遣し、その専門とする分野について実地に研修機会を提供する芸術家在外研修制度を昭和四十二年度から実施しています。

本制度は、これまで一六〇名を超える芸術家の方々を海外に送り出してきましたが、研修員ひとりひとりの研修の実体を伺い知ることが、なかなかできませんでした。

現在ニューヨークで研修中の俳優・森永明日夏さんと演出家・砂川幸子さんのお二人に連載をお願いして、研修中彼らが何に悩み、喜び、苦労しているかなど、生の声を聞くことができました。

オンブロードウェイの

研修3

砂川幸子



アメリカでの最初の作品は、クレア・ブース・ルース原作、スコット・エリオット演出「ザ・ウイメン」*1だった。一九三〇年代・ニューヨーク、上流階級の女達が、噂し合い、騙し合う喜劇。黒猫が爪を立てるように、優雅で上品だが鋭く他人を傷つける。男達は出て来ない。どこか他の場所に居て、妻達の言い分から顔は想像できる。衣裳・家具こそは古き良き時代だが、感情は今も昔も変わらない。女性には身近で痛快な作品だ。男性にとっては耳が痛いはずの作品だが、禁断の場所が多く、途中から男性客の方が圧倒に多くなった（特に男性の二人連れを多く見かけた）。

ブロードウェイの演劇は週八回。火曜から土曜の夜八時からと、水曜と土曜には昼二時からの公演、日曜の昼公演というのが基本だ*2。社会人が仕事の後、ディナーも味わって足を運べる。演劇が一般の娯楽であり一つの文化として認められているし、観客の目も肥えている。創り手としては緊張感があり、最高の場所だ。

この時は最初の作品だったので、学ぶことは沢山あった。それこそ、舞台の用語から始まり、演出の論理、衣裳のセンス、装置の仕組み。しかし、スタッフの段取りは日本の方が優れている、途中から私が導いていた……。

劇場で毎日アメリカ人に囲まれ、生活や行事に触れ、少しずつアメリカの生活が見え始めた。特に美術館で絵を見たとき、今まで視覚的に気に入っていた絵の本当の意味が見え、胸に響いた。

*1 アメリカン・エアライン劇場で一〇月二日から一月二三日までの期間限定公演だった。
*2 最近の変則の公演もあるが、回数にはユニオンで守られている。

在 外 研 修 だ よ り

ニューヨークにきた3

森永明日夏



皆様こんにちは、日本ではGWが終わった頃ですねー（って載るのは一か月後か）。NYも、暖かくなってきた。日本のGW中は、すごい寒い日などあって、先生も「五月はどこだー」なんて言っていました。これは、明るい色のTシャツで街が賑わうでしょうね。

さて、今回は日本の演劇とアメリカの演劇の違いってなんだ!? というつまらないようで、興味深い話題です。この質問を、こっちでがんばっている演劇関係の人におつけてみました。

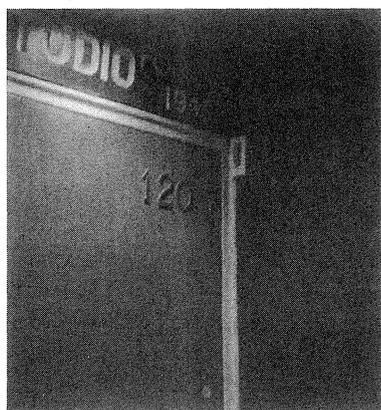
①文化、歴史的に大きな違いがある（NYと日本で活躍する演出家）。②客（同じ研修できている役者、演出家）。③芝居を創るときに、真実を求める姿勢（同じ研修できている演出家）。④懐の深さ（学校の日本人）。⑤完璧な役割分担（NYでのプロのスタッフ）。等、等。

そうだな。全部当たってると思う。でも私が今演劇学校で、役者の勉強をして思うのは、徹底された基礎って事かな? その基礎とは真実であること。演劇とは、劇場という空間に拡大され

た自己暴露である……らしい。

だから、演劇のクラスでやる事も自分自身をよく知ること。そのためには、たくさんエクササイズがあつて、ときには皆の前で太泣きしたりするのだ。泣こうと思つて泣くんじゃなくて、自然に涙が止まらなくなるから不思議だ。この前生徒の一人が言った。まるでセラピーみたい。舞台の上では自分が道具なんだから、自分を知る、自分のBEHAVIOR（他人に対する、ふるまい、動作、態度）を知るの当たり前。とは先生のお言葉でした。

次回からは、長期連載!? で、今回の複数の（違い）について、生の意見を詳しく、がんばり、書いていくつもりです。お楽しみに。



ハーバード・パークスタジオ

文化庁では、我が国の芸術文化の振興のため、芸術家等を海外に派遣し、その専門とする分野について実地に研修機会を提供する芸術家在外研修制度を昭和四十二年度から実施しています。

本制度は、これまで一六〇〇名を越える芸術家の方々を海外に送り出してきました

アメリカに触れ

砂川幸子



アメリカでの研修第二本目の作品は、ケビン・ベーコンの一人芝居「Almost Holy Picture」、演出はマイケル・メイヤー氏。夜「ウイメン」の本番に付きながら、朝から夕方までの稽古参加は辛くないと言えば嘘になるが、その分多くのことが学べた。最愛の家族を失った男の、彼なりの神との交流を描いた作品で、宗教のこと（キリスト教・アメリカ原住民の迷信・日本の神道まで描かれている）、医療のこと、その他諸々調べることがあったが、作者ヘザー・マクドナルドの深い世界を共有できた。ケビンも毎回誠実な演技を全力で魅せてくれた。上質な深い作品だが、観客は賛否両論だった。

アメリカでの研修第二本目の作品は、ケビン・ベーコンの一人芝居「Almost Holy Picture」、演出はマイケル・メイヤー氏。夜「ウイメン」の本番に付きながら、朝から夕方までの稽古参加は辛くないと言えば嘘になるが、その分多くのことが学べた。最愛の家族を失った男の、彼なりの神との交流を描いた作品で、宗教のこと（キリスト教・アメリカ原住民の迷信・日本の神道まで描かれている）、医療のこと、その他諸々調べることがあったが、作者ヘザー・マクドナルドの深い世界を共有できた。ケビンも毎回誠実な演技を全力で魅せてくれた。上質な深い作品だが、観客は賛否両論だった。

生きることを覚えるという、ヒューマンな作品だ。それだけにアメリカの生活を知っていた方がより楽しめる。これは稽古だけの参加で、本番には立ち会っていない。研修七か月目にしてまとまった時間ができたので、アメリカ中西部へ旅行に出た。ニューヨークから出たことのなかった私は、生まれて初めてアメリカを見た。ワシントンD.C、バージニア、ゲッツティスバーグ、ピッツバーグ、オハイオ……生のアメリカを見て、今まで戯曲の中で見えなかった部分もはつきり映るようになり、稽古中に見逃していた物が、今になって見えるようになった。演劇は、基本的に戯曲という骨組みを大事にし、理解しやすいように作られる。アメリカ人の演技は日本の感覚からすれば一見大袈裟に映るかも知れないが、彼らはごくごく当たり前の、生活に基づく感情表現をしていることが改めて理解できた。

お客さんの違い

森永明日夏



が、研修員一人ひとりの研修の実体を伺い知ることは、なかなかできませんでした。現在ニューヨークで研修中の俳優・森永明日夏さんと演出家・砂川幸子さんのお二人に連載をお願いして、研修中彼らが何に悩み、喜び、苦労しているかなど、生の声を聞くことができたいと思います。

皆様こんにちは！ NY生活も残り一年、私は最高の折り返し地点を過ごしています（詳しくはHP見てくださいね）。

さて今回は、前月あげたテーマの「②お客の違い」についてです。

本当にたくさんある劇場が連日ほぼ満員です！

本当にうらやましいよう。日本で芝居を見に行く人ってとても限られている気がします。

それに、こっちのお客さんは皆、楽しみにきてる。日本のお客さんは（すべてじゃないけど）腕組みしてみるぞって感じですから。こっちは、ライトが消えた時から、拍手と、口笛だったりね。ま、これも文化の違いか。でも、厳しいところもあって、評判

が悪く、客も入らなかつたりすると、なんと一週間で打ち切り!! ってなこともざらにある。それが、ブロードウェイの舞台であつてもね。だから、準備の段階で、成功を目指して役割分担された、各部署が、妥協のない仕事をしてるんだろうね。それにしても、どんなにお金がかつたつて、一週間で打ち切りだよ。どうだ！ この潔さ！

日本でも厳しいけど、こんな制度があつたらいいと思う。ただ、売れる芝居と、良い芝居は時に反比例するので。うーん、どっちがいいかなんて決めつけることはできないんだけど。だって、モー娘はめっちゃめっちゃ、売れてるけど、歌も踊りも下手だしね。だけど、私はあのグループを世に送り出した、多くのプロデュース力はすんごおおい、って思うのだ。ちょっと、それできちやつたけど。一度も劇場に行つたことのない皆様、どうぞ生の人間のパワーを感じに劇場に行つてみてください！ 来月は「③芝居づくりの違い」についてです。

文化庁では、我が国の芸術文化の振興のため、芸術家等を海外に派遣し、その専門とする分野について実地に研修機会を提供する芸術家在外研修制度を昭和四二年度から実施しています。

本制度は、これまで一六〇〇名を超える芸術家の方々を海外に送り出してきましたが、研修員ひとりひとりの研修の実体を伺い知ることは、なかなかできませんでしたが、現在ニューヨークで研修中の俳優・森永明日夏さんと演出家・砂川幸子さんのお二人に連載をお願いして、研修中彼らが何に悩み、喜び、苦勞しているかなど、生の声を聞くことができればと思います。

メイキング・オブ・ミュージカル

砂川幸子



そもそも私がニューヨークに興味を持ったきっかけは、やはりミュージカルである。研修九か月目にして、ようやくミュージカルに携わる事ができた。それも二作品も。

五月末の二週間、「BABY」という一九八〇年代のオフブロードウェイ作品のワークショップに参加した。上演は未定でも、作品を練り直す為に、こちらではしばしばワークショップというシステムを取る。台本と音楽を作る事が主軸だが、俳優組合も一役買っていて、オーディションで俳優を選んで雇っている。

初日に台本と楽譜を配布し、最初の二・三日で現状の台本と音楽を一通り俳優に覚えてもらい、四日目からいよ

いよ立稽古。その稽古で、スタッフは匙加減を調整してゆく。一〇日間のワークショップで、最終的には稽古場に観客（演劇関係者のみ）を招き出来栄を披露した。短い時間ながら良質な作品に仕上がった。今回特に感じたのは、ドラマが感情を作り、感情が歌を生む。上手かどうかを評価する人は誰もいない。いかにドラマに引き込めるか、音楽はその手段である。

息をつく暇もなく、「シラキユースから来た男達」の稽古に参加。六月一日に始まった。初演は一九三八年、ある種ブロードウェイ・クラシック作品である。振付はロブ・アッシュフォード、「モダンミラー」で今年のトニー賞を受賞した期待の星。彼との仕事で、「必然なるダンス」を日々学んでいる。感情が歌を生み、更に情感が昇華して舞踊になる。ミュージカルは総合芸術だけに奥が深い。あと残り二か月の研修で、どれだけ吸収できるか。抱えきれない程多くのことを掴んで帰りたい。

芝居づくりの違い

森永明日夏



皆様こんにちは、すっかり夏のNYセントラルパークでは例年の無料コンサートが数多く開催されていますよー。さて、さて今回は芝居を創る、つという過程においての私の熱い、想いを語ります!?

③芝居を創る時に、真実を求める姿勢（同じ研修できている演出家）

どこの演劇学校でも、基礎を徹底しています。その基礎とは、演劇の基礎は真実であること。たくさん演劇学校はあるし、皆それぞれにメソッドがありますが、根つこの部分は、とにかくBENG TRUTHFULなのです。

日本の役者さんでは、舞台の上で泣くシーンで泣きまね、泣く振りをしてる方大勢います、そりゃー、なきゃー

いいってもんじゃないけど、こちらの役者さんは心で感じて皆、本物の涙流しています。自分の心が本当に何かを感じて、それを観客も感じて感動できる。それが、舞台の良さだとも思うんだけど。やっぱり、生の人間が生の人間に送る、パワーって何よりもすごいし、強いと思う。

そうそう、テレビの現場では、悲し

いシーンのスタート直前にある女優さんが、「目薬いれますか？ 監督？」なんて聞いてそれを当たり前のようにやってた。嘩然。ま、テレビの本番を見て、それが形になってたからいいけどさ。でも、こっちはどんなに大きな舞台でも皆本当に、本当に、自分の心を動かしてる!! 気がするぞ（しかも舞台だったらちょっと待って、目薬いれるから。なーんて事はできないしね。ははは）。その訓練を基礎の段階でみっちりやるしね。学校での詳しいクラスの内容などは、HP (<http://happy.gn.ro/LeiterFromNY.htm>) 読んで下さいねー（だって文字数少ないし、色々制約があつて書けない事もあるんですよ。お、こっちは）。

それでは、次号は「④懐の深さ（なんのこっちゃ!）」についてです。



文化庁在外研修NYメンバーと共に
前左 砂川氏 後列右 森永氏

メイキング・オブ・ミュージカル2

砂川幸子



今年作曲家リチャード・ロジャースの生誕一〇〇周年に当たる。『サウンド・オブ・ミュージック』の作曲家といえば、ご存知の方も多いと思う。ブロードウェイ・ミュージカル『シラキユースから来た男達』は、一九三八年にロジャースが作詞家ハートと組んで作った、世界初のシエクスピアを原作にしたミュージカルだ(注1)。原作は『間違いの喜劇』。生き別れの双子の兄弟をたずねて世界を遍く歩くアンティフォリスと奴隷のドロミオ。故郷のシラキユースを発つてはや七年、二人はエフェシスの町でとんでもないことになる……。今私はこの作品に関わっている。人生の色々な情景に重なる、数々の美しい歌を、毎日賞味している。

『シラキユースから来た男達』は五週間の稽古場でのリハーサルを経て、一〇日間の舞台稽古を行い(注2)、七月二五日にプレビューが始まった。プレビューというのはあくまでも試演で、八月一八日の公式初日に向けて、日夜修正の打合せと稽古が続く。この公演に限ったことではなく、どの公演も、

ブロードウェイの名に相応しいように切磋琢磨が行われる。作品によっては、地方やオフ・ブロードウェイで試演を重ねてからブロードウェイに上がってくるが、最近はこのように直接ブロードウェイで勝負する作品も増えているようだ。

毎日、演出家・振付師はもちろん、脚本家・音楽監督・美術・照明・音響・衣裳各デザイナーは公演を見守り、全体のバランスを観察し調整を施す。舞台監督はそれらを全部整理し、常に最新情報を管理・伝達をする。作家が紙片に書いた新しい台詞を台本に直すのも彼の役目だ。私はその部署にいるので、変更の推移を全て把握し、稽古にも立会い、本番では観客の反応変化を観察している。演劇と比べて、大きな変更が多い。

私達が日本で二日間の舞台稽古で初日を開けていたことを考えると随分悠長だ。二日間では机上の計算から外れることが許されないが、一〇日舞台稽古があれば、魔法のような効果を様々な加減で実験できる。その上、プレビ

ューという調理・熟成期間がある。長期上演を想定しているからこそだ。だから、たかだか二日の舞台稽古の一月限定公演で、ブロードウェイと勝負なんてとてもできない、と肌で感じた。また、逆に日本の舞台の現場で鍛えられた私は、しばしば後で問題になりそうなことを先に解決するなど、見えないう所で随分活躍している。日本人は綿密なのだ。アメリカ人のアイディアと、日本人の精密さが手を組めば、相当凄いことができる、というのは既に先人が立証していることだが、これからは私も日本でアメリカ人と手を組んで、日本流に極上のエンターテインメントを創っていきたい。

この作品の公式初日・オープニング・ナイトが、私の研修の最終日で、翌日の飛行機で日本に帰国する。一年という期間はあつという間だが、短い時間を十二分に活用して三年分くらいの収穫は得られたように思う。何よりも当初の目的であった、「日本で海外の作品を翻訳上演する際、著作上の変更における理解を求める方法・芸術上の意図を伝達する技術・アメリカの演劇界との信頼関係」は達成できた。心残り是他劇場を見る時間が限定され、見逃した作品がいくつもあることだが、また普通の旅行者として来た時にでき

ることなので今回は諦める。多くの演劇人にニューヨークに来て目を養って欲しい。

ひと頃は、アバンギャルドな物を学ばないが、本来の演劇、嘘のない生きたミュージカルを追及するために来て欲しい。もちろん、全部が素晴らしいわけではない。酷い物だつて数え切れないほどある。数多ある酷い物の上に、凄惨なものがあることを忘れてはならない。それを見分ける目を持つために、また、その上で生まれた「凄惨なもの」の賞味を損なわないように日本にもたすためにも来て欲しい。

受人先を見つげるのもたいへんだと思うが、推薦団体でそういう人の手助けができるようになることを心から望むし、推薦団体から依頼があればできることなら手伝いたい。

最後に、私が在研に参加する機会を作って下さった全ての方に感謝の気持ちを伝えたい。心より、ありがとう。

(注1) 以後、シエクスピア原作の作品は多く輩出されることになる。その代表例は『キス・ミー・ケイト』である。

(注2) 舞台稽古は、昼から真夜中までの二時間、間に一時間の食事休憩、一時間ごとに五分の休憩が約束されている。

在 外 研 修 だ よ り

一年を振り返って

砂川幸子



八月二〇日、私の研修は終了した。昨年九月からおよそ一年、あつという間のできごとだった。逆に何年もいたかのような錯覚も憶える。最初の一か月は、生活に慣れないせいもあって、ずいぶんゆつくりと時間が流れた。着いて時差に馴染んだころ、テロがあった。その日から稽古場に参加することになっていたので、テロの日も休まず、研修先に向かった。アパートから研修



The Boys From Syracuse

先までは徒歩だったもので、私の往復に支障はなかったが、交通麻痺で出勤できない人が大勢いて、私もすぐ帰るよにいわれた。

家に帰ると、同じ研修員の森永さんから電話があり、六八丁目にある学校から、四六丁目西の私のアパートまで歩いて避難に訪れた。彼女は朝、学校に向かう途中、バスの中から煙をあげるワールドトレードセンターを見てしまった。学校でも大騒ぎで、歩いてここまで来る間は帰路を急ぐ人々に押し潰されそうになったそうだ。彼女は混乱を体験した。私は、していない。

テロが私におよぼした影響は、二日間のブロードウェイ劇場閉鎖と、稽古延期。稽古再開してからもすぐ参加できる状況にはならず、二一日からの合流になった。それまでの間、台本を何度も読み、いくつかの作品の上演台本や資料などを調べて、アメリカの舞台用語・やり方などを予習した。しかし日本でもそうだが舞台用語は特殊で実際の習得は現場にでないことには始まらない。のみならず、稽古に参加した当初、字面で考えていた音と、実際の

在 外 研 修 だ よ り

発音の違い、速度の違いに驚愕した。台本も、黙読で意味は全部理解しているのに、台詞がまったく分からない。仕方がないので指で台詞を追ってついていくしかなかった。それで皆から取り残されてはいけないと、小道具の配置を把握し、進んで小道具のケアや転換、稽古場残留物の処理などを行った。しばらくして字面とヒアリングが一致するようになってきた。そのころ、演出部のヴァレリーという女性が、私の迅速で正確な行動に一目置いてくれて、食事に誘ってくれたり、しゃべり言葉を教えてくれるようになった。その積み重ねから、舞台用語も覚え、舞台稽古では小道具の配置を担当者に説明したり、紛失物を探したり、俳優のケアをしたり、小さな活躍を重ねて、舞台監督のピーター・ハンソン氏をはじめ、いろいろな方々に存在を認めてもらった。

それでも、仕事の指示は即座に理解できて対処できるのに、皆で食事しているときの会話についていけなかった。その状態はしばらく続き、クリスマスも近いある日、終演後スタツフ大勢で飲みに行ったとき、雲が晴れるきっかけができた。そのカフェのテーブルには白い紙が敷かれており、クレヨンで何でも好きな物を描いていいのだ。そこに、ヴァレリー他数人がスラングを書き始め、「これ分かる？」と聞いてき

た。今まで、キャッチできなかった言葉の多くはスラングだった。しかも普段よく皆が使っているのもスラングだった。その皮切りは「くそつたれ」という意味の英語。「この単語の意味は××君」。例にでたのは仕事がいい加減で言い訳ばかりしている「嫌な奴」の名前。私は即座に理解できた。そしてなぜかこれ以降、堰を切ったように会話が聞こえるようになったのだ。皆はいまだに語り継ぐ。「ヘレン・ケラーの『水』、サチコの『くそつたれ』。せめてもう少しきれいな言葉で目覚めたかった。食欲な活躍の裏に、実はこんな言葉の悩みもあったのだ。

年明け以降は、本誌での連載も始まり、研修もますます充実し、忙しく日々を過ごすうちに、瞬く間にかが流れた。仕事で出会った方の好意でオーディションを見学できたり、話題作『モダン・ミラー』の舞台稽古を見学したり、『プロデューサーズ』の舞台裏を見学したり、文学散歩のような旅行を計画してもらえたり。大勢のブロードウェイ演劇人に支えられて、濃密な一年間を過ごすことができた。その前提には「日本政府から来た留学生」という肩書きが役立ったと思う。一年は短い。たかが一年、されど一年。この経験をこれから日本の演劇に生かしていきたい。

森永明日夏



皆様、お久しぶりです！ 覚えていてますか？ もちろん、覚えていてくれますよー。

二か月振りの森永明日夏です。さて、私の留学生生活も二年目に突入、残り一〇か月になりました。ってなわけで、題名も新しくなり（自分の世界観を広げるとかいう意味です）、ここNYで私を感じたこと、目で見えた世界をがんばってお伝えしていきます。今回は前号でぶちまけていた日本とアメリカの演劇の違いについての最終項と、芝居づくりについて、の私の一人言です。

こちらの、第一歩はオーディションです。日本の場合、スター制だったり、事務所の方だったり。工藤夕貴さんも言ってたじゃないですか。絶対やりたいう役があっても、事務所の力だったり、いま売れているだけの理由で若い、才能もない子が仕事を取って悔しい思いをした。だから、日本より実力で、しかも、誰にでも扉が開かれているオーディションで仕事を取れるアメリカで

勝負しなかったって。

こっちにも、そんな制度（スター制とか）はありますが、オーディションの占める割合、結果、影響は日本のそれとは比べ物にならないと思います。そしてアメリカ自体、移民の国で、何かを求めて世界中からやってきた人たちの集まりなので、自分にやる気さえあれば、いくらでも人生は開けていくの！ まじで。

さて、私も九月から新しい、FALL TERM に入りました。先生は変われど、やはり演技の基礎は BEING TRUTHFUL。最初の ACTING のクラスでやったことは、自分の POSITIVE な面と NEGATIVE な面、五つずつ皆の前で言うことでした。私は——。いつでも前向き、好奇心旺盛、などなど。役者をやっていると、本当に自分の内面に向き合う場が多いです。先生のお言葉によると、自分を理解できない人に他人の人生を理解し、演じられるわけがないってことでした。って言う

在 外 研 修 だ よ り

でも、本当に自分を理解するなんて到底できないことなので、役者の勉強は終わりが無い、難しいって言われるのかなー？

日本では、「役作り」といって、どうやって本当の自分と切り離して役をつくるか。みたいな定義があることがあるけど（そもそも役作りに定義なんてない!!）、こちらでは、台本を読んだ後、役の中にまず、自分をみつける。クラスの発表の場でも、舞台の上でも「その人」がそこに存在している場合、どんな技術も太刀打ちできない時があります。

演劇とは、舞台という空間にまで拡大された自己暴露。といった有名な詩人がいました。うーん、そうだなあ。人間なんて、自分の中にいろいろな面をもっていますよーね。

だから、どんな役がきたって、必ず自分をみつけられるはずなんです。でもこの役はこういう役だから、この役はそんなことしないから。なんて演出家や先輩に言われたり、言ってるのを聞いたことがあります。その時は素直に聞いてたけど、同じ役をまったく同じように演じてても、違いはでてるんです。だって、演じてる人間が違うんだもん。役に人間をはめ込むなんてナンセンスだー。日本は伝統芸能の文



グリニッチビレッジの夕日

化だし、日本人特有の気質で、HOW（どのように見られるかとか）、どのよう泣けばいいかとか）を大切にしてみよう傾向があります。でもこっちは、いつでも WHY（なぜ泣くのか）を大切にします。これって、普段の生活でも取り入れたらいいかもよ。外見を気にするより、まずは自分の中身と向き合っ、自分を知ってみよう。って思う私でありました。

私のHP (<http://nappy.gn.to/LetterFromNY.htm>) 読んでくださいー。

EVENTS!! IN AMERICA

森永明日夏



皆様こんにちは——。二〇〇二年も終わりですね。私の留学生活もあと七か月。帽子、マフラー、手袋が手放せない季節ですが、もともともと楽しんでぞう。

今回は、少し、演劇から離れて年末の三大行事、ハロウィン、サンクスギビング、クリスマスの雰囲気皆様にお届けしようと思います。

一〇月三十一日ハロウィン
今年、ハロウィンPARTYにパレード、子どもたちとお店や家をまわるTRICK or TREATにも参加しました。

この日は、街の地下鉄でもお店の店員にも仮装している人をたくさんみかけました。私は、友人とハロウィン



サンクスギビング

SHOPにグッズを買いにいったのですが、なんともすごい行列！この買い物から大騒ぎがはじまっているかのよう、買い物も楽しかったです。

三十一日は、夕方六時から仲良しの家族の子どもたちと近所のお店をまわるTRICK or TREATをしました。仮装した親子連れが街にはいっぱい、子どもたちは、お菓子でいっぱいになった、各々の袋を大切に持って歩いていました。

八時からは、マンハッタンの有名なハロウィンパレードを見にいきました！寒かったけど、楽しかった。仮装は本当に凝っていてみているだけで、楽しかったです。

ものすごい人だけど、この時期にくる方がいらしたらいいっていいですよ。

でも、やはり何より楽しかったのは、自分が仮装して出る仮装PARTY!!
とにかく、大人も子どもも楽しんでいるのが心から伝わってきたので、日本にもこんな馬鹿騒ぎなお祭りがもっと増えるといいな(だって、テレビの

レポートとかまで仮装してたよ。

一月末サンクスギビング

この週末は、家族や親戚と集まって、ターキー、パンプキンパイ、スイートポテトパイなどを皆で食べます。

なんか、日本のお盆かお正月みたいな感じかな。

この週末は、主要な駅は帰省する人でごったがえします。去年は花を持って人を駅でたくさんみかけました。私は、仲良しの友人の家のDINERに呼ばれて行ってきましたよ。初のサンクスギビングDINERにわくわく。大きいターキーに克蘭ベリースイスをたっぷりつけて(日本じゃ絶対、肉に甘いなんてしないんだけど。ハンバーグにパイナップルも嫌だったもん)いただきました。私こっちにきて、ターキーはとても好きになったので、すんごく美味しかったです、ほかにはこれまたたつぷりのスイートポテト。スイートポテトの身にマシユマロがついてオーブンで焼いてあるっていうイメージかな? 私は元々サツマ芋が大好きなので嬉しかった——! と思ったら、すごく甘かった。しかも、色はオレンジです(こっちのサツマ芋ってオレンジ色なの)。

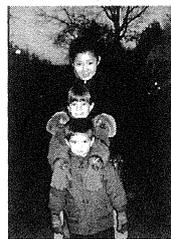
十二月二五日クリスマス
去年のクリスマスは、元ホストファミリーと過ごしました、この家族は熱心なクリスマスチャンなので、日本のクリスマスとはまた違ったBIGイベントでしたよ。映画で見たことあると思いますが、子どものいる家にはあの大きなクリスマスツリー、そして、その下にはプレゼントの山! 私のファミリーは二五日の朝、一個ずつ皆でプレゼントを開けるのが習慣ですごく楽しかったです。でもね、じつは三日前くらいから私と両親は子どもが寝たあとに、せつせとラッピングしてたのだ。ははは。クリスマスは本当に一大イベントで、街も人もクリスマス一色。わーい、今年も楽しみます。

今年も残り一か月半。日本の紅白や、お雑煮も懐かしいけど最後の年末、どっぷりアメリカン文化を楽しみます。よいお年を!!

学校の詳しい情報は YAHOO 森永明日夏で検索してHPをぜひ見てくださいね!



クリスマス



森永明日夏



皆様、あけましておめでとうございます。さて、二〇〇三年一発目は、一五歳で渡米し、ブロードウェイに立っている日本人女優、玉置康子さんとの対談をお送りします。

現在 N.Y. Ford Center で公演中の『42nd Street』にオリジナルキャストとして出演中の彼女は、私のよき親友でもあるので、いわゆる「対談」ではなく彼女の肉体的魅力が伝わればいいと思っています。それでは、じっくりお楽しみ下さい。

森永 やっちゃんです！

玉置 よろしくお願ひします。

森永 まずは、ブロードウェイの女優

として、舞台に立つために必要なことを聞かせてください。

玉置 私の場合は、歌や芝居よりもダンスの比重が大きいかな。ただアメリカではショーによって要求されるものが、まったく違うから自分をよく知ることが必要。そして心のバランスを保つこと、いつでも心の休まる所をみつけておくことが大事な。

森永 厳しい世界にいくほど精神のメンテナンスが大切になっていくよね。

では、年齢、身長など、体格のハンデをカバーするには何が必要ですか？

玉置 自分の要所をわきまえていれば、それを使えるし、プラスにできるはず。ハンデはユニーク、個性だと考えた方がいいかも。

森永 次に、オーディションでの振付について、細かい技術は必要ですか？

玉置 バレエのときには細かい技術が必要かもしれないけど、ミュージカルの場合はそこまで気にしなくても大丈夫。長い振りのときは、もちろん覚えられるわけじゃないので、勝手につくって最後まで踊った方がよいと思います。森永 では歌については、どんなことを要求されますか？

玉置 主役の場合は、歌をまるごと歌ったりするけど、コーラスのオーディションでは、いきなり譜面を見せられることはないな。ミュージカルでは、地声、高声、鼻にかかる声など、ミックスという声が必要になります。

森永 オーディションに受かりやすいダンススタジオってありますか？ また、どうやってオーディション情報を手に入れるのですか？

り

だ

修

研

外

在

報

玉置 スタジオによってオーディションの合否が変わることはまったくありません。情報は、専門誌や口コミ、所属している事務所から手に入れます。日本で情報を得たいなら、WEBSITE

を見てみるといいと思います。

森永 ブロードウェイは日本人にとって敷居は高い？

玉置 確かに東洋人の枠は狭いけど、アジア人俳優の数も少ないわけだから、

結局どんな人種にしてもこの世界でやっていくのは厳しいってことかな。

森永 なぜ日本でもなく、ブロードウェイだったのでしょうか？

玉置 気付いたらこうなっていたといった感じかな。ミュージカルは好きだったから、心のどこかにはブロードウェイを目指す気持ちもあったのかな。

森永 でもさ普通、小さいころからミュージカル好きでも、頭の中にブロードウェイなんて浮かばないよ。

玉置 本は読んだことあったし、少しは知識があったのかも。

森永 小さいころから目指してたんだ。

玉置 うーん……。ただ踊りたかった。

森永 この一言に深く納得。だって、私もただ芝居が大好きで芝居したかったから。そして気付いたら、こんな人生って感じだもん。

舞台以外の過ごし方について、心身をキープしたり、向上させるためにはどうしていますか？

玉置 ダンスのレッスンは欠かせませんが、それと、すごくほしい仕事じゃなくても、オーディションを受けに行ったりします。それは場慣れするためと、雰囲気をつかむため。ずっと行かないと空気とか忘れちゃうでしょ。

森永 なるほどね。

皆さん、怖がってないで、がんばるオーディションを受けましょう。自分にもいって、ははは。

この仕事についているがために、遊びや恋愛を犠牲にしたりしなきゃいけないときってありますか？

玉置 あるかもね、でも全部犠牲にするのは絶対よくないよ。高校のときは、学校終わってすぐダンススクールだったから、友達と遊ぶこともなかったけど、犠牲って思ったこと一度もない。楽しかったしね。ただ、精神面が

HAPPYでなくなるとオーディションにも舞台にも出ちゃうから、ときにはなまけることも必要です！

森永 それに他人と比べないことだね。まずは、自分のやっていることを楽しむこと。

Y A H O O 森永明日夏で検索してHPも見てくださいね。

森永明日夏



初めてNYに来たのは八年前の六月。そのとき稽古をしていた演出家、仲間と七日間の初海外旅行、初NYに降りた。

街のエネルギーにもすごい刺激を受け、劇場、観客、演劇に携わるすべてのことに感銘を受け、必ずここに戻って演劇の勉強をする!! と無謀な夢をもったのだ。

そして六年後、私は夢を現実にした。(夢はみるもんじゃなくて、つかむもの、っていうアムロちゃんの歌詞が私は大好きでよくカラオケで歌ってます。ははは)



NYの象徴、ロック・フェラービルディング

でも、NYにくる直前の私は仕事、仕事。ものすごいプレッシャーとストレスの中、しかも突っ走る性格がゆえに、壊れる寸前だった。

私、芝居が好きでこの仕事してるはずなのに……。なんで……。辛い……。本当は、役者をやめようかとも思った。私は、芝居が好きでここまで生きてきただけで、自分を苦しめるためじゃない、って。でも、八年前に心にした無謀な夢をかなえる前にここまでがんばってきたんだし、このまま仕事を捨てるのはさびしすぎる、っと思いついて、

かく一か月の休みをとり、NYに飛んだ。そして、私は人生のターニングポイントになるであろう、NY生活への扉を開けた。

数か月後には、文化庁の試験を受け、数か月後には、自分でVISAをとり、数か月後には、NYで暮らしていた。

ここにきてからの一年半も含め、ここ二年で出会った世界中の人に感謝している。

ある人に言われた。
二年アメリカで演劇勉強したからって、何になるの？

在 外 研 修 だ よ り

そうね。確かにダンスや、歌のように目にみえて結果がでるもんじゃない。でも、私がこの留学で得たものは、心から笑える思い出と、出会った人たち、心が張り裂けるぐらい辛い思い出と、失った大切な人たち。この一年半は、役者の前に森永明日夏として絶対に忘れられない一年半だ。そして、いつかそれが舞台にあらわれる……、と信じている。

演劇とは、劇場にまで拡大された自己暴露。本当にそう思う。そして、その基礎を本当に大切にしているアメリカ演劇の中で学ぶものは、「自分」ばかり。自分の性格、自分の癖、自分の経験。自分の意見。どれだけ、皆の前で自分を裸にできるか……。そうした上で、テクニクや声のことを学んでいく。

これは、普通の生活でもとても重要なことだと思う。自分を知ることは、他人を知ること、自分を好きになることは、他人を好きになることだ。

見かけばかり気にするのではなく、まずは自分の心に素直になつて自分を信じる。素敵でしょ？

ま、言葉でいうより実際は難しいかもしれないけど、それに、NYは本当に世界の首都で、世界中から夢や希望をもった人たちが集まっています。チャンスも多いけど、



お世話になったハーバード・バーコフスタジオ

それをねらってる人も多い。

みんな、がんばるオーディションを受け、才能と運のある人だけが選ばれていくのです。中途半端な気持ちで生活していると、あつという間においていかれます。だから、NYで生活すると顔つきが変わるとか、いつでも攻撃態勢になつて疲れる、なんて意見も聞きます。

でも、やりたいことがはっきりして、夢がある人には絶対お薦め！ あたつて砕けたつていいじゃん。

私のエッセイをどれだけの、若者が読んでるのか知らないけど、ぜひぜひチャレンジしてほしいです。本当に自分のやりたいことにね。

私の留学生活も、残り半年。私らしく、たくさん泣き、たくさん笑い、大好きなベールを食べて過ごします！
ははは。

SEE YOU! ASUKA
N.Yからの手紙 (<http://nappy.gn.to/LetterFromNY.htm>)